

有年原・クル^三遺跡 現地説明会資料



奥
津
家

2007年2月11日
赤穂市教育委員会

1 なぜ発掘調査をしているの？

有年^{うね}地域には、遅くとも縄文時代後期（6,000年前、東有年・沖田遺跡）から人々が生活していたことがわかっています。また有年原地区の北側^{さん}山麓^{ろく}には100基もの古墳が造られているなど、この地域は「文化財の宝庫」と呼ばれています。

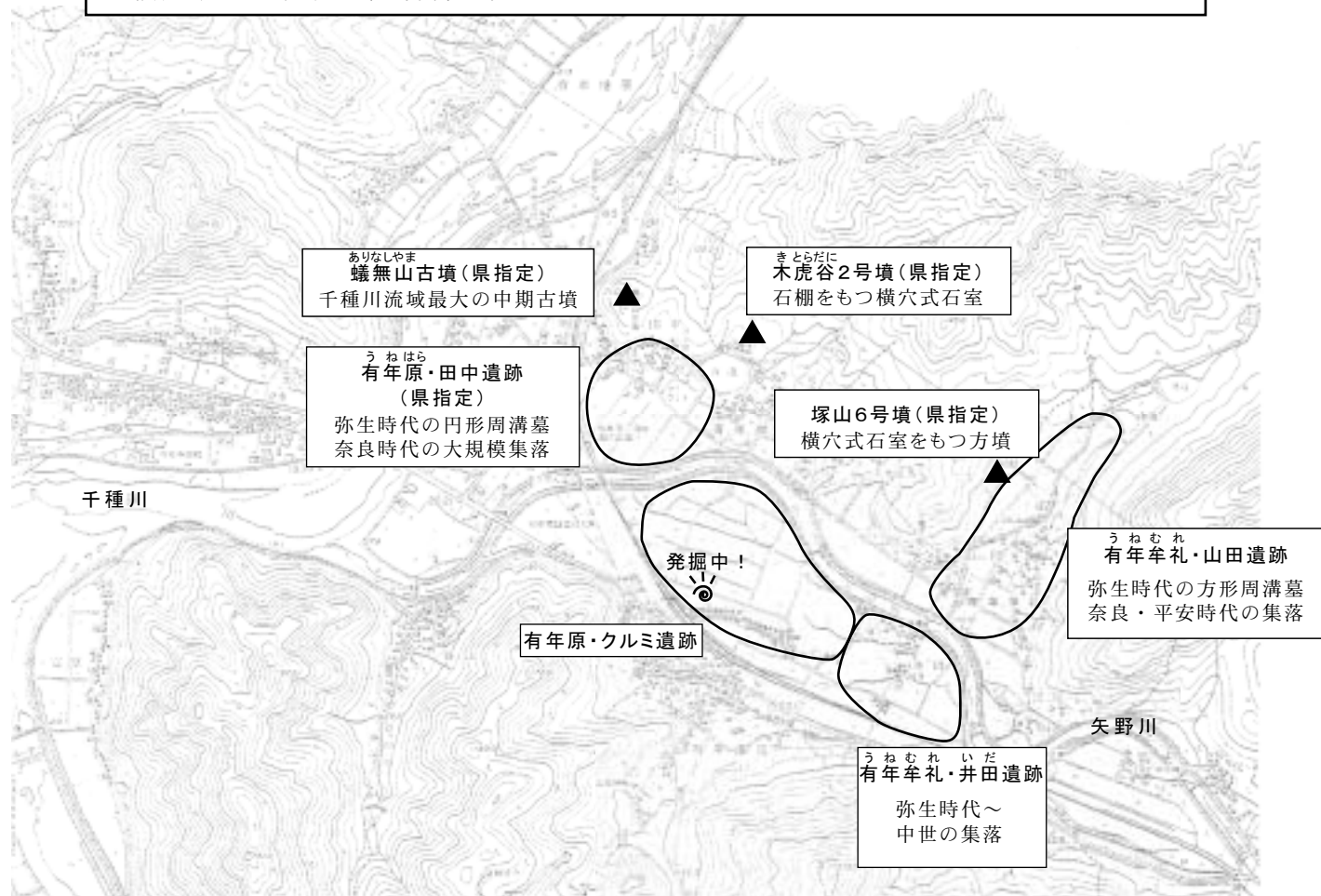
有年原・クルミ遺跡は有年地域にあります。発掘調査がほとんど行われたことがなく、どのような遺跡かわからないままになっていました。

近年になって、有年原・クルミ遺跡を含む矢野川南岸地域は、有年区画整理事業が行われることになり、赤穂市教育委員会では10年前から遺跡の有無を確認するための調査を行ってきました。そして道路敷設工事の事前調査として、このたび初めて全面調査を行うこととなったのです。

2 周辺の有名な遺跡

有年原・クルミ遺跡の周辺には、市内でも有名な遺跡があります。それが有年原・田中遺跡や有年牟礼^{むれ}・山田遺跡^{やよい}です。それぞれで弥生時代（1800年前）の大規模墳墓が見つかるほか、有年原・田中遺跡では飛鳥～奈良時代（1400年～1200年前）の大規模建物群が見つかります。

このほか、東有年・沖田遺跡では弥生・古墳時代の集落跡が、西有年・長根遺跡^{こだい}では古代の建物群が見つかります。

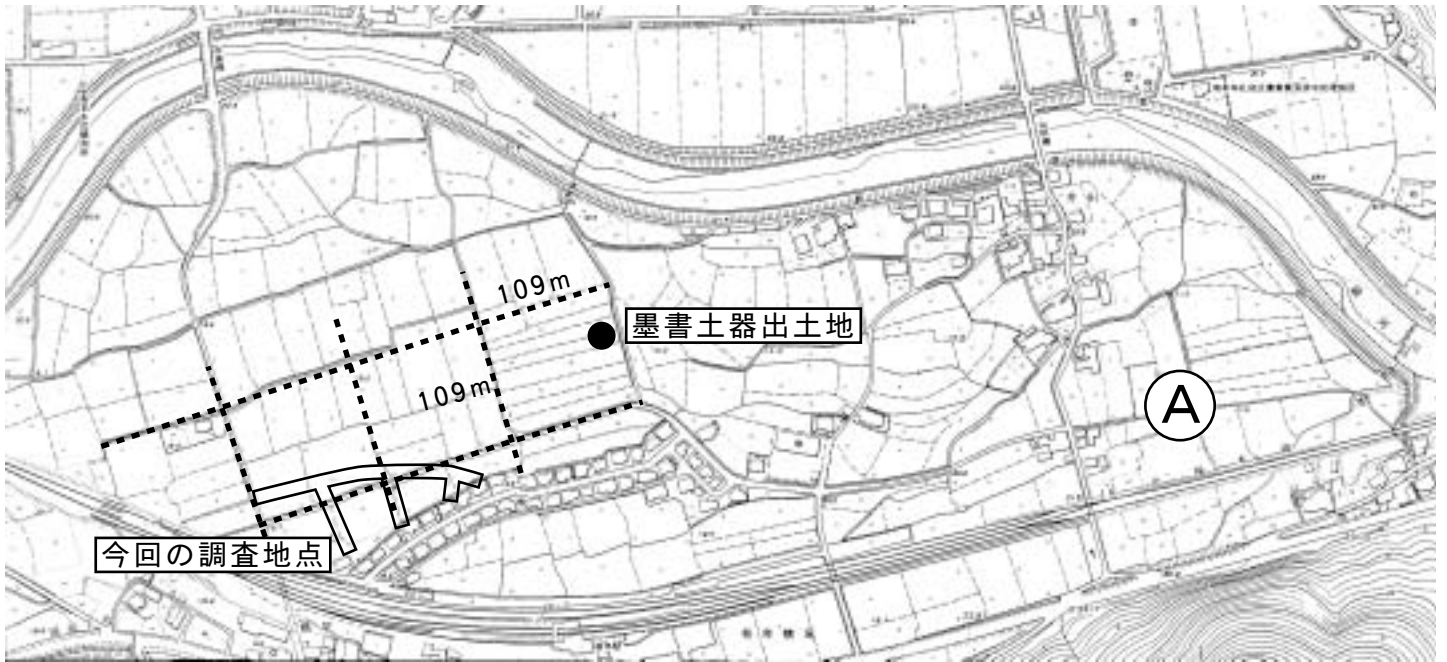


3 有年原・クルミ遺跡周辺の地形

遺跡の発掘調査は、たんに発掘して土器などを見つけるだけではありません。その土地の成り立ちや人々の生活の変遷などを明らかにしていくことも目的の一つです。

矢野川南岸は、これまで「ほ場整備事業」などが行われたことがなく、昔の田んぼの姿が残っているところ。つまり昔の地形が残されている可能性が高い地域といえます。

そこで、現在の地形を見てみてください。何かおかしいと思いませんか？

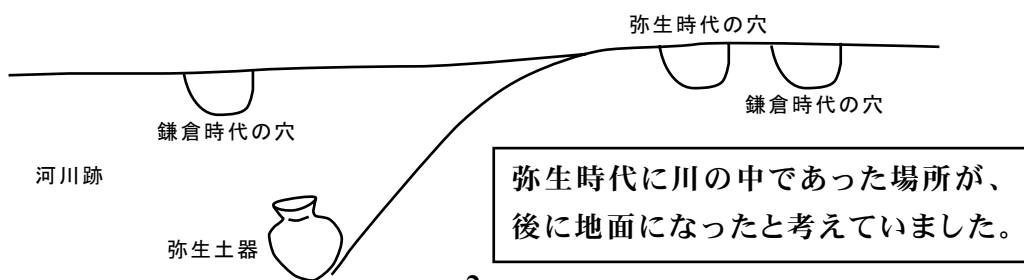


四角で囲んだところにだけ、きれいな区画が見つかります。

これは、「古代のほ場整備事業」とも言える「^{じょうりじわり}条里地割」が残されたものの可能性が高いのです。「条里地割」とは古代から中世の制度「条里制」によってつくられた土地区画で、一辺を約109mとする正方形区画によって区分されています。図示した部分は特に良く残っており、ほぼ確実に中世以前の遺跡があることが推測できるのです。

4 これまでの調査成果から考えていたこと

このような考え方を踏まえ、10年前より行ってきた^{しくつ}試掘調査では、上図のA地区の調査で、川の中から弥生土器が発掘されました（下図）。そこで、A地区の地面の多くは、古代から中世にかけてできたものだとして推定していました。ちなみに、矢野川が東から西に流れていることからわかるように、地面は東から西に傾斜していますので、今回の調査地点周辺では古代以前の遺跡は存在しないと考えていました。



5 発掘調査の成果

今回の調査によって、弥生時代後期の溝^{みぞ}、古代から中世にかけての溝や柵列^{さくれつ}が発見されました。弥生時代後期の溝はいくつかの地点で見つかっており、一番多いもので5条の溝があります。すべてつながるかどうかはわかりません。ただし、この溝のなかには幅が狭いにもかかわらず、底の深いものがあつたりすることから、人工的に掘削されたものと考えています。溝のすぐ脇でほぼ完全な形の土器が出土していることも、人々の生活の匂いを感じ取ることができるでしょう。

今回の調査結果は、これまで古代以降に地面が作られたと考えられていた調査地周辺が、すでに弥生時代後期（1800年前）から安定した地面であったことを裏付けるものであり、さらに土器の出土状況から、周辺に人々が生活していた可能性を示すものです。

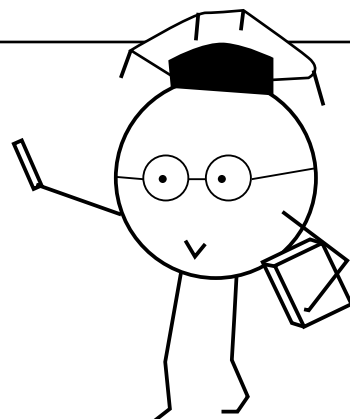
弥生時代は、周囲に溝をもつ「環濠集落」^{かんこう}が営まれる時代であり、人々と人工的な溝との関係は、とても深いものでした。あるときはごみ捨て場、あるときは洪水対策、あるときは灌漑用水^{かんがい}など、稲作が始まって平野に集落を営み始めた弥生人にとって、溝は必要不可欠なものだったのです。

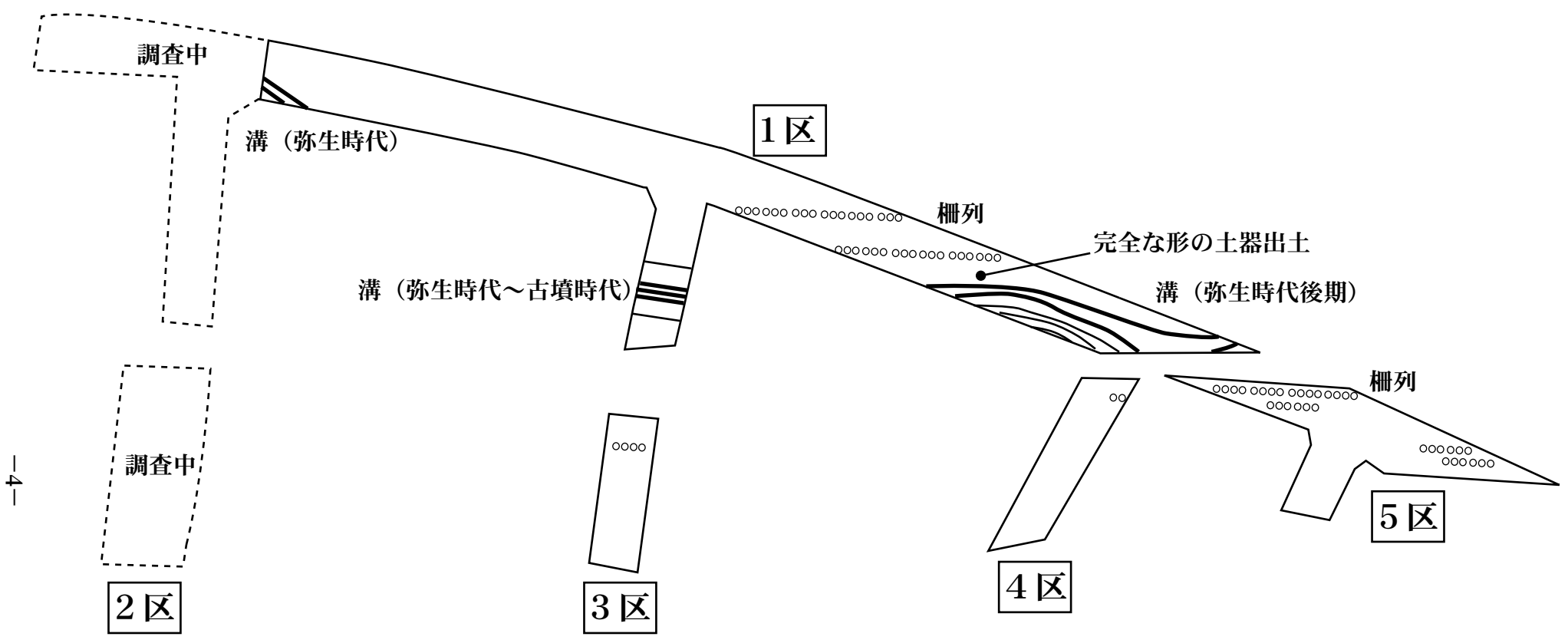
古代から中世の柵列は、詳しい年代が不明なものの、数十メートルにもわたって存在すると考えられ、道や建物、田んぼなどに伴う区画施設であると考えています。何度も作り直されていることから、相当長期間、使用されていたものでしょう。この性格については、今後の発掘調査で検討していく必要があります。

6 「奥津家」^{おくつやけ} = 古代の役所！？

さて、有年原・クルミ遺跡の全面発掘調査が始まり、これまでの出土遺物の整理を行うなかで、平成14年度の試掘調査で出土した土器について、奈良文化財研究所に依頼して墨書^{ぼくしょ}の鑑定をしていただきました。その結果、奈良時代前半のこの土器の裏面には「奥津家」と書かれていることが判明しました。鑑定の結果は以下の3点です。

- ・「家」とは古代の役所＝官衙（かんが）であることを一般的に示す。
- ・「奥津」は人の苗字か地名であることが多いが、苗字の類例がほとんどないことから地名である可能性が高い。
- ・見事な筆跡から、一般の人が書ける字ではなく、官衙関連の遺跡であろう。





平成18年度 有年原・クルミ遺跡発掘調査の主な遺構

7 奥津って??

残念ながら「奥津」という地名は、現在の字名に残ってはいません。しかし類似した名前に、「津村」があります。また「津村向」という字も残っており、「津」が地名である可能性は高いと考えます。

「津」とは舟着き場を指すと考えられ、「津村」はその周囲にあった村と考えられます。「奥津」は「奥山」などという地名との関連性よりも、有年地区全体で見たとき、奥まったところにある津であることから、名づけられたのかもしれない。

播磨には『播磨国風土記』という全国に誇れる古代の地誌がありますが、残念ながら赤穂郡はこの記載から漏れています。播磨国赤穂郡の下には「郷」「里」という区分があり、これらの名称に用いられていたかもしれませんが、現在のところわかりません。



● 墨書土器出土地点

赤穂市1985『赤穂の地名』より

8 ほんとに役所？

赤穂市内では、字の書かれた土器がこれまでに3点見つかっています。

1点目は、有年原・田中遺跡で「富」と墨で書かれた土器が見つかっています。

2点目は、西有年・長根遺跡で「大」と墨で書かれた土器が見つかっています。

3点目は、有年牟礼・山田遺跡で「秦」と刻まれた土器が見つかっています。

しかしながら、今回のように複数の文字とともに「家」という役所を匂わす墨書土器は、初めての出土になります。ただこの土器は果たして、もともとこの場所にあったのでしょうか？

ここで考えていただきたいのが、出土土器の様子です。この土器はほぼ完全な形で見つかり、削られてもいないことから川で遠いところから運ばれてきたとは到底考えることはできません。つまりこの場所が官衙関連の遺跡である可能性が大変高いと考えることができます。

そこで生きてくるのが、2ページに記載した「条里地割」です。墨書土器が出土した地点は、ちょうどこの条里地割の中に入っているのです。また今回の発掘調査による弥生時代遺跡の発見は、弥生時代の頃から、すでに安定した土地であったことを示しており、官衙遺跡である可能性を高める結果となるでしょう。

まだ有年原・クミ遺跡の発掘調査は始まったばかりで、その全貌が見えるのはまだまだ先ですが、これからの継続的な発掘調査に期待してください。